

予防ネットという考え方

—岡山史料ネットのこれまで—

今津 勝紀

はじめに

岡山県は自称「晴れの国」である。ハレとケのハレにも掛けているのだろうが、この晴れは天気をさすのが一般的である。岡山県の場合、降水量一ミリ未満の日は昭和五六年から平成二二年までの平年値では全国一位の二七六・八日であり、ほぼ晴れの日が多い¹⁾。海を隔てた香川県では毎年渇水に困っているのだが、岡山でそれが問題とならないのは、県内を南北に吉井川・旭川・高梁川といった大河川が流れることによる。県北部の中国山地が豊かに湛える水の恩恵に浴しているのである。

もちろん、列島規模での前線の通過や台風による降雨はあるのだが、四国山地のおかげで台風の直撃を免れることも多い。冬期には県北部を除いて、県南部ではほぼ確実に晴れの日が続く。この時期には、天気予報をみると山陰地方や県北部でどんよりと曇り・雪となっても県南部は晴天であることが多く、県南部の住民としては申し訳ない気分になることもある。「晴れの国」とは岡山県の中核機能が集中する南部を中心とした勝手なイメージにすぎないのだが、この地域は確かに自然環境に恵まれた側面がある。

この「晴れの国」なるキャッチフレーズは一九八九年より岡山県が広報活動で使い出した表現であるが、自然環境にめぐまれたことから、「災害が少ない」県とのイメージが導き出されることになる。岡山県は「晴れの国」であるとともに、台風や地震といった大規模自然災害の少ない県を自負しているのである。しかし、実際には小規模な災害は頻発しており、そうした根拠のない自負がかえって災いとなることがある。東日本大震災を経験した現在でも災害に対する緊迫感はあまり切実でないように思われるが、このようなイメージで語られる岡山での史料ネット活動のこれまでを述べておこう。

一、岡山史料ネットができるまで

(1) 鳥取県西部地震と岡山県域の被害

岡山県で史料ネット運動の機運が生じたのは、やはり二〇〇〇年十月六日の鳥取県西部地震、二〇〇一年三月二四日の芸予地震と、隣県で相次いで地震被害が発生したことが大きい。個人的なことでは恐縮だが、芸予地震が発生した際に筆者は研究室にて仕事であり、周囲の書架が轟音とともに一斉に動き出す恐怖に見舞われた。すぐさま机の下に潜りやり過ぎたのだが、同僚の部屋では書架が倒れ、部屋中が本で埋め尽くされる被害もあった。この時も岡山では被害らしいものはなかったのだが、阪神大震災・鳥取県西部地震・芸予

地震と岡山を取り囲むように発生する大地震に気が滅入ったものである。

岡山の人々が史料ネットなる活動が存在することを知り、はじめて体験したのが鳥取県西部地震である。この地震は、過疎化が進行する中山間地域に位置する鳥取県日野郡日野町に大きな被害をもたらしたが、神戸・鳥取・松江から資料救出のレスキューが行われ、島根大学を中心に山陰史料ネットが活躍する。その際、岡山の大学生も資料救出のボランティアに参加し、日野町などでのパトロール・レスキュー、襖の下張り剥がしなどの作業に従事した。岡山の地元紙で圧倒的なシェアをもつ山陽新聞でも、史料ネットのボランティアが被災家屋をまわりレスキューにあたる様子が大きく取り上げられ、大規模災害による歴史資料の保全が問題であることを訴える記事が掲載された。岡山県で史料ネットなる活動の存在を広く訴えた最初の報道である²⁾。

日野町の地域は、古代以来交通の要衝であり、『出雲国風土記』には出雲国仁多郡から伯耆国日野郡へと抜ける阿志毘縁道がみえる。これは現在、鳥取県と島根県を結ぶ県道一〇八号線に相当すると考えられるが、国境に恒常的な関がもうけられ、天平六年には出雲国内の牛馬・武器が国外に移動するのを規制していた。出雲から伯耆への移動制限だけが目的であれば山陰道の規制で対応するはずだが、この関が山間部のこの位置にあることが重要であり、阿志毘縁道が隣国の伯耆国から南下する陰陽連絡路となっていたことが考えられる³⁾。日野郡の日野町・日南町から岡山県側に南下するには、いくつもの峠があり、古代の陰陽連絡路を確定することはできないのだが、地震被害の激しい日野町根雨からは国道一八〇号で明智峠を越えて新見市千屋に至る。また同じく根雨からは、国道一八一号で四十曲峠を越えて真庭郡新庄村に続いている。後者はいわゆる出雲街道である。

このように峠を挟んですぐ南側に岡山県北が位置するのだが、この地震はその峠の向こうにも被害をもたらした。鳥取県西部地震で震度六強を記録した日野町は岡山県新見市と隣接しており、岡山県内では当時の大佐町・哲多町、新見市、真庭郡落合町・美甘町で震度五強を観測し、住宅の全壊七棟・半壊三一棟・一部破損九四三棟が公式に確認されている⁴⁾。鳥取県を中心に、全体で住宅全壊が四三五棟（うち鳥取県三九四棟）であることに比べると、岡山県内の被害は小さいのだが、新見市千屋地区を中心に被害が発生していた。実は岡山県もこの地震の当事者であったのだ。

（2）レスキューの失敗と反省

現在は新見市を核にした町村合併により消滅したが、筆者はたまたま一九九九年からスタートした哲多町史の編纂に携わっており、岡山県側で地震被害が発生した地域は旧の備中国阿賀郡・哲多郡の領域に相当した。そこで日野町などでのレスキュー作業が本格化するにともない現地を訪れた。新見市千屋地区は、岡山市内から車で二時間半程度の距離にある備中最北部の山間部に位置し、九割近くが山林で占められている。旧の字名では実・井原・花見・千屋からなるが、震源に近い花見・井原・実の地域にブルーシートのかかる被害家屋が多くみられた（図1）。これらはいずれも近世には鉄穴流しによる砂鉄採取やタ

タラ製鉄、牛馬飼育が盛んだったところであるが、日野町よりも人口密度は低く、広い範囲に損壊家屋が点在していた。

現地では、阪神大震災の際の史料ネットのパトロール活動と同様にビラを作成し、損壊した家屋を一軒一軒、車を飛ばして回るのだが、その効率の悪かったことをよく覚えている。そして、被災した家々を回ってみると、そのようなものはないと、にべもなくあしらわれるのが普通である。もちろん、その度ごとに、お宝のような古文書ではなく、日々の生活の云々、などと説明はするのだが、理解を得るだけの十分な時間を割いてもらうことはできなかった。

哲多町史がスタートしたとはいえ、まったく土地勘のないところであり、頼りとなる人もいない。新見市役所にも出向き、歴史資料の把握状況を伺い、ビラの配布その他もろもろの協力を求めたのだが、史料ネットの活動への理解を得るには至らなかった。また、現地のボランティアセンターなどでも交渉を重ねたが、これも理解を得られた形跡はない。その場で解体家屋の片付け作業の過程で出てきた資料がいくつも見受けられたので、こうしたものも地域の歴史資料ですので残す手立てを考えましようと思えるのだが、通じなかった。その後、何度か千屋を訪れ、面識を得た方々に重ねて様子をうかがったりもしたが、それらの資料が残されている痕跡は確認できなかった。恐らく現用にあらざる不要なものとして処分されたのであろう。

これは日野町の事例だが、すでに都市に生活の根拠を移している所有者が倒壊した家屋をそのまま処分する場合もあり、倒壊した家の扉に「ここには楽しい思い出がいっぱいあります。長い間お世話になりました、さようなら」などと書かれている所もあった。切ない思いを禁じ得ないのだが、こうした過疎化が進行する中山間地域が深刻な災害に見舞われた場合、地域社会の存立自体が危ぶまれるのが現状である。地域社会をささえる科学的な歴史認識は、社会の再生に不可欠なのであり、地域の歴史資料を保全することの意義の一端はそうしたところにあるだろう。日野町の場合、地元の郷土史研究グループが存在し、地元の方々の協力もあって、史料ネットの活動もスムーズに動いたのだが、同じように被害を受けた峠一つむこうの岡山県新見市千屋では、結局何もできなかった。地震が起きて困っているところに、いきなり見ず知らずの人間が来て、「古文書などどうされていますか」といわれても、相手にしてもらえないのは当然であろう。岡山弁も話せない。その地域で郷土史に関心を持つどのような人がいるのかも知らなかった。こちらに、いわば在地性・地域性がまったく欠如していたのである。当時、いまだ大規模災害時に地域の歴史資料の救出が課題であるとの認識が広がっていなかったこともあるのだが、それでも地域歴史資料の救出という点では明らかに失敗であった。

この失敗は事実であり甘受しなければならないのだが、災害が起きるたびに、こうした失敗を重ねるのも口惜しい。大規模災害以外にもさまざまな契機に地域の歴史資料は消滅しているが、日常的にも何かやることはあるのではないだろうか。これまで各地の史料ネットの活動は、災害が起きてから動いているのだが、その前に何かできることはあるのか

はないか。千屋の失敗は、地元との連携の欠如が大きな要因であったので、県内で多様なチャンネルなりネットワークを作っておくことが肝要と思われた。こうして大規模な災害に見舞われる前に（これ自体が大きな勘違いなのだが）、予防的なネットを作り準備しておこうというのが出発点である。

二 岡山史料ネットの発足

この後、二〇〇三年には宮城県北部で大地震が発生し、周知のごとく宮城ネットがスタートする。連続する大地震に列島が地震の活動期に入ったことがあらためて感じられる事態である。地震について言えば、歴史時代に入って以来、岡山の地域を巨大地震が襲ったことを明確に示す史料は見当たらないのだが、兵庫県から伸びる山崎断層が県の東北部を走っている。山崎断層は、貞観十年（八六八）七月に動いており、播磨国内の諸郡の官舎や定額寺の堂・塔が皆悉く倒れるという被害が記録されている。播磨ほどではないにしても美作や備前でもある程度の被害が発生したと考えられる。

貞観年間から元慶・仁和年間といった九世紀後半は、貞観五年（八六三）の越中・越後地震をはじめとして、貞観十一年（八六九）には二〇一一年の東日本大震災と同様の陸奥地震（この年には肥後でも地震が発生していた可能性がある）、元慶二年（八七八）には相模・武蔵地震、元慶四年（八八〇）には出雲地震、仁和三年（八八七）には南海地震といったように地震が連続し、列島各地が混乱に陥った時期である⁵⁾。いつの時点か予測することは不可能であるが、今後山崎断層が動くことは間違いない。また、同様に南海地震の危険度も高い。昭和の南海地震の際には、岡山の沿岸部にも津波は押し寄せており、県南部では液状化現象も確認されている⁶⁾。どの程度のものになるかはわからないが、こうした地震災害から岡山県だけが無縁であるとは考えがたいだろう。

正直なところ、冒頭に述べたように、岡山県は災害が少ないというイメージが強烈なためか、自然災害への緊迫感は、東日本大震災を経験した今でもあまり感じられない。豊かな自然に囲まれて、のんびりと生活をおくっているのが実情である。これはある意味で幸せなことではあるが、千屋での経験でもわかるとおり、大地震をはじめとする災害が発生してから、押っ取り刀で現地に駆けつけたところで、どうにも対応できないのであり、前もって準備をしておくにしくはない。県内の歴史関係者とそのような話を重ねるようになったのがこの頃である。

岡山県は人口規模が小さいので、大都市圏のような桁数で歴史研究者がいるわけではない。県下の大学に所属する日本史研究者は両手で数えられる程度であり、学生・院生の数も少ない。県内の機関では、岡山県史の編纂を基盤として、全国で二九番目の公文書館である岡山県立記録資料館が二〇〇五年に成立するが、博物館や教育委員会などの行政組織に所属する歴史研究者をふくめても両手で数えられる程度の人員である。古代吉備をかかえる岡山県の埋蔵文化財担当者が数十人、県下では総勢百人強になるのに比して著しくア

ンバランスであるが、それが現状である。

市民もふくめた、県下の歴史関係者の結集の場として機能しているのが、岡山地方史研究会・岡山近代史研究会などの研究団体で、雑誌の発行や例会活動を行っている。このほかに歴史を愛好する多くの人々が、それぞれ地域に即した郷土史研究グループを結成しており、公民館活動の一環としてのサークルなども含めると実数は把握しきれないのだが、おおよそ六〇強の団体がありそうである。学生もふくめて、こうした県下の歴史関係者が史料ネット活動の担い手もしくは支援者になると考えられるが、これら歴史関係者のささやかにして、ゆるやかな結集をはかろう、いざというときの意思疎通の円滑化のために、風通しを良くしておこうというのが、さしあたりの岡山史料ネットの設立目的である。

そのために二〇〇四年には、今津が岡山大学の地域貢献事業として学長裁量経費の申請を行うも不採択であったが、翌二〇〇五年には平成十七年度岡山大学学長裁量経費・教育研究プロジェクト地域貢献支援事業費の交付を受け、「災害など緊急時における歴史遺産の保全に関する県内自治体等との連携事業」がスタートする⁷⁾。さしあたり、これを契機に、岡山での予防ネットの活動が具体化することとなった。岡山史料ネットは、目の前にレスキュー対象が存在するわけではなく、岡山の現状に即した予防のためのネットワークであるため、規約や約款に基づく会員組織の形態をとっていない。関係者のゆるやかなネットワークにすぎないのだが、マスコミなどに岡山史料ネットの成立時期はと問われれば、二〇〇五年と答えることにしている。

三 岡山史料ネットの取り組み

① 史料ネット講演会

いわば啓蒙活動のような形でスタートする岡山史料ネットであるが、市民向けの講演会と学生向けのセミナーを企画した。講演会は岡山県立記録資料館との共催で、これまでに二〇〇五年より二〇一二年まで六回を開催している。

岡山史料ネットのスタートした二〇〇五年の場合には、二〇〇三年の宮城県北部連続地震を機にスタートした宮城歴史資料保全ネットワーク（当時）の世話人代表である東北大学の平川新氏が「文化財のための防災対策—地域の活動が史料を守る—」を、神戸の史料ネットで活動した神戸深江生活文化史料館の大国正美氏が「災害から歴史資料を守る試み—史料ネット運動の意義—」の講演を行った。宮城ネットはまさに渦中にあっただが、そうしたリアルな状況を報告いただき、神戸の事例とあわせて、史料ネット活動がどのようなものであるか知る機会となった。岡山県下で初めての史料ネットということで大きな反響を呼び、二〇〇五年十月二二日にNHK岡山「きびきびワイド六一〇」にて放映され、二〇〇五年十二月十九日付け読売新聞でも取り上げられた。

この講演会では他県でのネット活動の実際の紹介が中心ではあったが、今振り返ってみると、岡山県立記録資料館の在間宣久氏による「平成十六年台風一六号による岡山県下の

被害状況」は大変重要な意味を持ったと思う。この報告は、平成十六年の台風により岡山県の牛窓や玉野で図書館などに被害があったことについてのものだが、その後の岡山の災害状況を考えると、こうした小規模災害が岡山にとって如何に問題であるかを知らしめるものであった。実際には、こうした小規模災害は頻繁に発生しており、その都度史料の滅失が進行しているのである。岡山県立記録資料館では大型冷凍庫を設置し、水害により汚損した歴史資料の保全のための準備を整えている。

二〇〇六年の講演会では、岡山大学医学部の松尾俊彦氏による「岡山大学キャンパスの歴史的建造物・文書を保存し活用しよう！」と新潟県文書館の本井晴信氏の「『歴史資料』保存継承の現場を見続けて」の二本の講演を行った。松尾氏の報告は岡山大学病院の病院資料についての報告で、現在ではカルテなどは中央化されるとともに電子化されているが、それ以前は診療各科で個別に膨大な診療記録が管理されていた。しかし、保管のスペースの問題もあり、建物の改修に伴って、医学的に不要な記録が廃棄される危機にあることを訴えたもので、まさに足下の病院資料が問題であることを気づかせるものであった。病院資料は個人情報の問題もあり容易ではないが、ゆくゆくは幅広い活用が期待できるものでもある。医療機関が地域社会に果たしていた役割などを考える上でも有効な資料になり得るだろうが、現在にいたるまで最終的な解決をみていない⁸⁾。

二〇〇七年度の講演会では、小野市好古館の大村敬通氏による「小野市がめざす地方博物館の役割について」と鳥取地方史研究会の田村達也氏による「保存活動体験報告—官の立場、民の立場」の二本の講演を行った。大村氏は、小野好古館でユニークな発想による独創的な地域活動を行っており、岡山県の博物館にとっても大きな刺激となったと思われる。小野市で実践される、地域子どもたちと老人とを博物館を媒介にして結びつける仕掛けは、地域社会を活性化させる画期的な取り組みではなかろうか。田村氏の報告は、鳥取県西部地震でのレスキュー活動に従事した経験と鳥取県内の学校資料の調査と保存にあたった経験についてのもので、学校資料の重要性を喚起した。学校の統廃合により、保管されていた学校資料が失われることも多くあり、組織だって系統的にその保全と活用が図られている地域は少ないだろう⁹⁾。これも地域社会を理解する上での格好の資料であるだけに、その問題の大きさが憂慮される。

二〇一〇年度の講演会では、岡山県井原市文化財センター（当時）の首藤ゆきえ氏による「自治体史編さん後の資料保存活動の課題」の講演と県立記録資料館の下垣豪氏と今津による「他県での史料ネット活動の現状—宮城・山形・福島・新潟—」の報告が行われた。首藤氏は、井原市史編纂事業が完了した後の資料保存状況の検証についての報告で、町村合併により近隣の町村を合併する過程で旧役場文書の保全が問題となり、それを何とか保存するに至った経緯が報告された¹⁰⁾。旧の役場文書を保管する倉庫の取り壊しにともなう緊急レスキューの事例で、この場合は井原市役所の職員の力で保全に成功したのだが、実は岡山県内の行政機構はどこも十分な人員が配置されているわけではなく、管理権が行政にあったとしても空きスペースに放置されたままの歴史資料が多くあるのが実情である。

いわば行政内の未指定文化財のようなものであり、事態は深刻である。

二〇一一年度の講演会は、東日本大震災後のもので再び災害を強く意識したものとなった。倉敷市中庄地域に根ざした歴史研究グループである、中庄の歴史を語り継ぐ会の戸板啓四郎氏による「明治大正期中庄周辺地域を襲った災害について」と、県立記録資料館の定兼学氏による「大正期災害の新聞記事」、岡山史料ネットより岡山大学大学院の東野将伸氏による「災害データベース作成状況」の報告があった。戸板氏の所属する中庄の歴史を語り継ぐ会は、倉敷市中庄小学校一五〇年史刊行準備会として発足したもので、『中庄の歴史』を年一回刊行するとともに、「ふるさと歴史講座」を毎年春秋に行っているアクティブな団体である。中庄については、嘉永年間以来の洪水災害の記録が絵図ほかの資料に残されており、そうした災害を地域の歴史に即して語り継ぐ活動についての報告であった。定兼氏の報告は、岡山での水害記事を新聞記事より集めたもので、この地域での小規模災害がどのように起こっているのか特徴を明らかにした。二〇〇四年の台風十六号・二三号、二〇〇九年の台風九号は岡山にも被害をもたらしており、今後もこうした水害に備える必要があるだろう。

二〇一二年には再び、仙台でのリアルな取り組みについて取り上げた。東北大学災害科学国際研究所の佐藤大介氏による「災害から「ふるさとの歴史」を守るには—三・一一大震災・宮城での経験から—」と、岡山理科大学の富岡直人氏による「陸前高田市博における被災文化財レスキュー」、岡山大学大学院の中村晴菜氏による「県内史料所蔵目録の作成状況と課題」の三本である。佐藤氏の獅子奮迅の働きぶりは、史料ネット関係者なら周知のことであるが、二〇〇三年・二〇〇八年に引き続き三度目の震災に見舞われた宮城の経験をつぶさに報告いただいた。震災直後の初動態勢や保全活動の実態などをうかがうことで、前もって準備しておくべき課題も明確になった。レスキュー方法なども日々進化しているようで、そうした新たな知見も広く共有できればと思う。富岡氏は、考古学が専門であるが、自然史系博物館で早い段階からレスキュー活動に取り組んだ経験を報告された。今回の震災では自然史系博物館の連携はスムーズであり、岡山でも倉敷市の自然史博物館が現地の被災資料のリストアに協力している。岡山理科大学の学生も参加して剥製の修復を行った様子が、県内のテレビニュースや新聞でも紹介されている。

② 岡山史料ネットセミナー

当初、学生に向けて理解を広めようということで、史料ネットセミナーを企画した。二〇〇五年九月に第一回目を開催している。この際には、阪神大震災を機に結成された歴史資料情報ネットワークで当時事務局長をつとめていた松下正和氏と、二〇〇四年の台風による水害被害を受けた当時加悦町教育委員会に勤務していた矢野香織氏に講師をお願いし、松下氏は「歴史資料ネットワークの活動と展開 一九九五—二〇〇五」を、矢野氏には「史料ネットとできること、史料ネットのできることを題に、史料ネットについて紹介していただいた。当日は、宮崎県延岡市や熊本県八代市など直近の水害に被災した地域の方々

をはじめ、岡山大学以外の学生を含めて、若い人々を中心に三〇名余の参加者を得ることができた。

二〇〇六年の史料ネットセミナーは、襖の下張り文書の救出の実演を行った。たまたま岡山大学日本史研究室に搬入された西崎家の襖を素材に、当時岡山県立記録資料館に在籍していた横山定氏に講師をお願いし、襖の解体と下張り剥がしの実演を行った。この様子は山陽新聞で大きく取り上げられたのだが、こんなところに古文書があるのかと知った市民からの問い合わせが多くあり反響を呼んだ。なお下張り文書の整理は、現在岡山大学文学部の博物館実習の授業で継続して行っている。

二〇〇九年度の史料ネットセミナーは、市民にも対象を広げた体験型企画として、水損資料の取り扱いについて、神戸の資料ネットの協力のもとに行った。その背景には、同年に美作で水害が発生したことがあるのだが、今回は会場を瀬戸内市に移し、瀬戸内市教育委員会の協力のもとに行った。このセミナーでは、今津が「歴史遺産の保全と活用をめぐる地域力」として、水害などの災害も問題となることを紹介し、当時、歴史資料ネットワーク副代表であった松下正和氏による「災害と歴史資料—史料ネットの一五年一」、神戸大学文学部の地域連携センターの河野未央氏の「風水害からの歴史資料救出と保全—史料の『救命士』を目指して—」の後、水損した歴史資料の一次的な取り扱い方法の実演を行った。このワークショップに参加した市民の反応は良好であり、こうした体験型セミナーは予防ネットにとって有効であると考えられる。当初は学生向け講演会のような形でスタートしたセミナーではあるが、これからは対象を学生だけに絞るのではなく、広く市民を対象として、裾野を広げてゆくべきであろう。そのためにも、こうした体験型のワークショップを県内各地で開催してゆく努力を重ねてゆきたいと思う。

③ 地域歴史資料データベースの作成

現在、岡山史料ネットの活動の大きな柱となっているのが、災害が発生した際に即応できるよう、県内の地域歴史資料のデータベース化を進めている。これは宮城ネットの初動時の経験をもとにしたもので、万が一の場合には、このデータベースから被災地域の資料状況を推測することが可能となり、現地の教育委員会や郷土史研究グループとの連携に役立つと考えられる。

データは市町村史や各種報告書に記載済みの公表された資料から、資料名・資料所蔵者、その所在地、資料の時期などを抜き出し、データベース化している。もとより所蔵者の代替わりや転居などもあるので、資料の現状を正確に反映したものにはならず限界はあるのだが、これまでそうした資料情報が網羅されることがないので、それなりに有効であると考えられる。公開については、適切な方法を模索しているところで、現状では未完成であることもあり、史料ネットのお世話役の所でのみ閲覧が可能な状態となっている。

なお、作業の進捗状況であるが旧国でいうと、美作国は現在十の自治体からなるが、作業に着手しているのが鏡野町、久米南町、津山市、奈義町、真庭市、美咲町、美作市であ

り、勝央町、新庄村、西粟倉村の三つについては着手できていない。現時点で史料数は三四八点を計上している。備前国は、赤磐市・岡山市（北区、南区、東区、中区）、瀬戸内市・玉野市・備前市・和気町からなるが、ほとんど未着手であり課題である。備中国は、浅口市、井原市、笠岡市、吉備中央町、倉敷市、里庄町、総社市、高梁市、新見市、早島町、矢掛町の全十一自治体からなるが、備中については調査が一応完了している。データベース化した史料総数は一九四七点で、このうち町や大字が判明するものは一四三八点にのぼる。今後はこの情報のアップデートを考えている。

おわりに—もう一つの失敗—

以上が岡山史料ネットのこれまでの活動の概略であるが、最後にもう一つ記しておかねばならないことがある。二〇〇九年の台風九号による水害についてである。同年八月に列島を襲った台風九号は兵庫県宍粟郡佐用町などで死者・行方不明者二二名にのぼる被害をもたらした。佐用川流域では、流木が川をせき止めたことによる水害が発生し、多くの家屋が浸水する。この水害により地域の歴史資料も被害を受け、神戸の資料ネットがレスキューを行ったのだが、ここで特筆すべきは、佐用町教育委員会や住民からのレスキュー依頼が多くあったことである。地元からのレスキュー依頼に応じて、水損資料のレスキュー・保全活動が行われ多くの資料の救出が実現したのだが、これは、まさに阪神大震災以来、神戸の資料ネットが地道に地元との連携を模索・構築してきた成果であろう¹⁾。史料ネット活動の蓄積を実感させる出来事である。

一方、台風九号は岡山・兵庫県境で集中的な降雨をもたらしており、兵庫県の佐用町と同様、隣接する岡山県美作市でも水害が発生していた。特に美作市の江見・土居で被害が激しかったが、土居は、播磨から国境の峠を超えて美作に入った最初の出雲街道の宿場町であり、ここが濁流にのまれた（図2）。この時も美作市に居住する岡山地方史研究会の古くからの会員とともに、美作市役所を訪れ歴史資料のレスキューへの協力をお願いするのだが、反応は芳しくなかった。初動の遅れもあるのだが、結局、まともな峠一つ超えたところでは何もできなかった。岡山の史料ネットを取り囲む山々は高く険しいが、いつの日か峠を超えたいと思う。

1) <http://www.pref.okayama.jp/page/detail-2143.html>

2) 『山陽新聞』二〇〇〇年十一月二九日。

3) 今津勝紀『『出雲国風土記』にみえる阿志毘縁道をめぐって』（平成14年度～平成17年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書『中山間地域における地域形成とその歴史的特性に関する総合研究—島根県石見地方の地域調査と鳥取県日野地方の被災史料救出保全活動の成果をもとに—』研究代表者 島根大学法文学部教授竹永三男）二〇〇六年。

4) 内閣府「平成十二年（二〇〇〇年）鳥取県西部地震について」平成十五年九月十九日。

5) 今津勝紀「古代における災害と社会変容—一九世紀後半の危機を中心に—」（『考古学研究』五八—二、二〇一一年）。

- 6) 若松加寿江『日本の液状化履歴マップ 745-2008』（東京大学出版会、二〇一一年）。
- 7) 岡山史料ネットの報告書は以下の通りである。『平成十七年度岡山大学学長裁量経費・地域貢献支援事業「災害など緊急時における歴史遺産の保全に関する県内自治体等との連携事業」報告書 岡山史料ネット』二〇〇六年三月、『平成十八年度岡山大学学長裁量経費・地域貢献支援事業「歴史遺産の保全と活用に関するネットワーク・岡山」報告書 岡山史料ネットⅡ』二〇〇七年三月、『岡山大学文学部プロジェクト研究報告書 十三 「歴史遺産の保全と活用をめぐる地域ネットワークに関する研究」 岡山史料ネットⅢ』二〇〇九年九月。
- 8) 九州大学の場合、大学病院の再開発に伴い平成二〇年（二〇〇八）に総合研究博物館に移管され、概数のみの仮整理の状態ではあるが「保存」されている。今のところ九州大学と岡山大学でこの問題が明らかとなっているが、表に出にくい資料でもあるので、注意深く様子を見守る必要がある。
- 9) なお、宮城県では古代史研究者の大平聡氏が小学校資料の保存と調査に精力的に取り組んでいる。
- 10) 首藤ゆきえ「自治体史編さん後の資料保存活動の課題」（『岡山地方史研究』一二三、二〇一一年）。
- 11) 二〇〇九年台風九号の水害被害については『Link【地域・大学・文化】』（二号、二〇一〇年）に小特集が組まれており、松下正和・藤木透・田路正幸・前田徹氏が稿を寄せている。詳しくはそちらによらねたい。